

## 黒島傳治の未発表作品『巡禮』

—— 解題と本文紹介 ——

佐藤和夫

この小説の表紙となっている原稿用紙の右側に、

秋風ハ さぬきの山や いよの海 わか経めぐりし 国を吹くらむ

星湖

と朱色の毛筆で中村星湖の歌がちらし書きしてあり、左側には六拾九枚、添削券、七枚、香川縣小豆郡苗羽村字芦ノ浦、第三回、黒島通夫と毛筆（傳治の自筆と思われる）で書かれ、原稿用紙の左下に、早稲田文學社撰定（小説の原稿用紙も同一）と印刷されている。

本文はペン書きで、通し番号は付されていない。

添削券とは添削料のことであろう。

大正六年頃、傳治は小説や短歌を通夫のペンネームで文学雑誌に投稿していたので、この『巡禮』もこの類いのものであり、それを中村星湖が、添削をしたのであろうと思われる。

中村星湖も「中学世界」、「中学文壇」に作品を投稿しつつづげながら、文壇にデビューしていった文学者であることを知り、傳治も同じ道を歩もうと思いい投稿したのであろうか。

星湖にも明治三十九年「新小説」の懸賞小説の一等に当選した『盲目巡礼』（最初の題名は『老巡礼』）という小

説がある。

『巡禮』は昭和四十五年四月―同八月に「筑摩書方」から刊行された『黒島傳治全集』（全三巻）には収録されていない作品である。その理由と作品について小田切秀雄は、同集I巻の「解説」で「七〇枚近い『巡禮』というのは、現に六七枚目まであって内容的からあと一、二枚が失われていると見られる原稿で、まだ習作ともいえないほど稚拙」であるとし、さらに「小説を書くのが好きだったららしいこと、小説修業をはじめたらしいことがわかるという以外はまったくとりえがない。」と述べ、又同氏は同三巻の「解説」でも「内容的にはまったく稚拙ないたずらに冗漫なだけのもので、ページ数の関係から収録しなかった」と指摘するように、文体、表現、構成といった面からみれば、小説としては不完全なものであるが、黒島傳治という一人の作家の成長過程、小豆島という閉鎖的な土地と傳治が今後どうかわかってゆくのか、小豆島に於いて、巡禮は各村との人間交流という重要な役割を果たしていると考えられる。

六拾九枚と表紙には記してあるが、現存のものは六十七枚であり、その最後は「とも思」である。不明の部分の六十八枚の最初は「われた。」となり小説は完結しているのではないか。小説の展開上それ以上は考えにくいのである。後りの部分には中村星湖の短評のために、傳治が原稿用紙を余分につけておいたともとれるのである。

原文を尊重する立場から、誤字、その他についても敢えてママを付さなかった。後記の傍線を施した部分の注は中村星湖の筆によるものである。

(注1) 削除

(注2) うとはしなかった

(注3) み

(注4) 変

(注5) 菌

翻刻に当り居出耀子氏(黒島傳治長女)、北代次郎氏(小豆島内海町財団法人岬の文教場保存会運営委員長)、高橋和生氏(小豆島パークホテル取締役)にお世話になった。厚くお礼申し上げる。

## 巡禮

黒嶋 通夫

詠歌がすむと、兵太郎と三吉は金剛杖を持って、すじ庵あんを出て濕った細道を下った。庵守あんもりは兵太郎と知りあひであつたので、「まあ、休んでおいでなされ。」と繰り返して親切に言ってくれたのであつたが、無理(注1)に二人は休まずに歩いた。(注2)そして細道を「指教へ」材が言つてゐる方へ曲つて行つた。

先に行つてゐる四五人の巡禮を追ひ越した。そしてまた、その先を行つて居る一と組の巡禮を——その組は男女合はせて七人であつた——追ひ越して、次の庵に着いた。庵では、先きに来てゐた巡禮の一と組が丁度詠歌を唱へてゐるところであつたので本尊の眞正面や參詣したしるしに納める「お札ふだ」の箱の前はふさがつてゐた。二人は他の人々の間をせり入つて「お札」を納めて、賽銭をなげた。

そして詠歌を唱へはじめた。

先に来てゐた、一と組は詠歌がすむと、庵を出て行つた。

その後から、二人が追ひ越した一と組の巡禮が来た。

兵太郎は丁寧ていねいに詠歌を唱へてゐたので、二人が庵を出る時には、後から来た巡禮の後になつてゐた。が、彼等は、

すぐ追ひ越して先になつて歩いた。……

二人は、昨日始めて巡禮になつて村を出たのであつた。

彼れ等は、菅笠を冠つたり、金剛杖をついたり、札挾をかけたたり、珠數を持ったりして巡禮といふものになつて居るのだ、といふ感じが殊更に強かつた。そして、なんだか浮世を離れて、人としての苦しみから逃れて、氣持よくふはくとして居り得る者の仲間に入つたやうに思はれて快かつた。それが處々で知りべに出會ふと、(彼れ等はまだ、自分の村から遠く離れてゐなかつたので。)尚更自分が巡禮といふ特殊なものになつて居るといふ感じが強くされて嬉しかつた。

——これから、所々を巡つて行くうちにどんな事が起るだらうか、と先の事を氣づかうてみたり、また、一度も経験した事のない事を見て行くのだと思つて快くも感じた。

——これが最後になつて、何處かで死ぬのではないかしら、とそんな事も思はれた。——併し、かういふ を思ふのが樂しかつた。——くれぐれも浮世離れたといふ事が樂しかつた。——年上で、妻子のある兵太郎も、うら若い女に戀せられてゐた三吉も同じやうに。

兵太郎は、よく三吉に話しかけた。——彼れは家に居た時の生活を回顧したり、その時分の感想を思い出しては話した。

が、三吉は面白がつて聞かうとはしなかつた。

兵太郎は、三吉が陰氣な堅苦しい男であるのを常から知つてゐたので、なるだけ話しかけまいとした。そして三吉が好きなやうにさせて置かうと思つた。が、彼れの人の好すぎる交際好きな、いつも他人の笑顔を見てゐなければ満足出来ない性質は知らず知らずの間に、いつもうつむいて怒つたやうにしてゐる男に話しかけさせた。そして

話しかけると、その事を終りまで委細に言ってしまうはねば、聞手に對してすまぬと思ふ心からして、長々しく話し續けた。

三吉は巡禮になり得た快さを、内心で感じてゐながら、外見は苦しさうに見えた。そして兵太郎が話しかけるとなほ、苦しさうに見えた。——ろくに返事もせず、路傍の草を見つめたりして。——

## 二

次の庵で詠歌がすむと、田の中へ通じて居る細道へ曲つて行つた。兵太郎は大きな、そして陽氣な聲で、「南無大師遍照金剛」と叫んで歩いた。すべて、S地方を、巡る巡禮はかう言つて叫んで歩くのが習慣となつて居るので、なにも珍しい事ではなかつたが、兵太郎が陽氣な、高らかに響き通る聲で叫んだので、先に行つて居る巡禮が振り返つて、二人を見た。その巡禮は、老媪が二人と若い娘が三人で一と組になつてゐた。二人がその女ばかりの組を追いつつ時に、三吉は、ちらとなんだか自分が嘗て見たことのあるやうな顔を見た。それは、後から三人目に歩いてゐる娘であつた。…………

五分ばかりして、二人が次の庵に着いて、

「比所の御本尊大師太神宮鎮守總じて日本大小の神祇。今上皇帝寶祚延長國體鞏固萬民快樂、現世安穩父母師長六親眷屬、乃至法界平等利益。」と早やに詠歌を唱へて、「我昔所造諸惡業。皆由無始、貪瞋癡。從身語意、之所生一切我今。皆懺悔。」

「弟子某甲三吉、盡未來際、歸依佛 歸依法歸依僧。」

「弟子某甲三吉、盡未來際、歸依佛 弟子某甲三吉、盡未來際、歸依佛 歸依法歸依僧。」

「弟子某甲三吉、盡未來際、歸依佛意 歸依法歸依僧意。」

「弟子某甲三吉、盡未來際。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不慳貧、不瞋意、不邪見……」

と唱へてゐる處へ、さきの、娘が来た。三人の娘は「お札」を納めて、詠歌を唱へた。三吉が見たことがあるやうに思はれる娘は、白い藝術家が持つてゐるやうな白い木綿の新しい手覆をはいて、黒漆色の珠數を持つてゐた。

三吉が娘をぢろりと見たりして居る間に、兵太郎がずん／＼先へ詠歌を進めてゐた。

「一心填禮、萬德圓滿釋迦如来、眞身舍利、本地法身法界塔婆、我等禮教、以我現身、入我々入佛加持故、我……」

兵太郎は、三吉に用舎なく、ずん／＼、と自分だけが唱へて行つた。

三吉は、こつまで来ると、次は何と言って唱へたら良いのか知らなかつた。それに、兵太郎が早や口に、無造作に唱へ流して行くのでついて唱へるのが出来なかつた。三吉は、他人が一心に詠歌を唱へて居るのに自分だけ黙つてゐる、きまり悪さを感じた。彼れは、後方へ行つて、杖でとつ／＼と傍の石をいぢつてゐた。

女は詠歌がすんで出かけた。「女等の詠歌は短かつたものだからすぐすんだのだ。若い男に後方から見つめられる、きまり悪なさの目でちらと三吉を見ながら。

次に、巡禮が行く可き所は、寺院であつた。三吉が寺院へ行くと、女はも一人の女が納經所で納經帳に寺院の本尊の名を書き入れて貰つて居るのを待つてゐた。三吉が詠歌をすませて寺院の門を出てもまだ出て来なかつた。三吉は振り返つて寺院の門内の女を見つめたりした。

十丁ばかり歩いて、丘の上の庵へ来た。三吉は氣が鬱としたやうで、兵太郎が詠歌を唱へてゐるのにもかゝらず黙つて濕つてゐる腰掛に坐つてゐた。そして、前のやうに、黙つてゐるきまり悪るさも感じなかつた。彼れは、あの女をたしか見たことがあるやうに思った。併し、どうしても、何處で見たのか思い出せなかつた。女の温和な

鼻と唇との間にたゞようである單純な、そしてその單純さをかなりの深さまで、おし進めて行つてゐる氣分と、ヴァイオリンを聞いてゐるやうな感じのする眼は、たしかに何處かで見た事があつた。そして、女を見て彼れの記憶にのみがへつて来る感じが、今更らに貴いものに思はれた。

やがて、女は一と組の者と一緒に来た。三吉等二人は、詠歌がすんだので丘を下らねばならなかつた。

## 三

その日は順禮が多かつた。兵太郎が、或る庵へ行つた時にその庵坊主に、「この頃は一日何人ぐらゐる通りですか。」と訊ねると、

さうだすなあ、昨日は六百人あり来やしたが、今日は日和がいゝけに、もっと通つてゐやす。」と、坊主は言つた。寺院などへ行くといつても絶え間なくに詠歌の聲が響いて居るといふ有様であつた。兵太郎は道を歩きながらよく、他の巡禮をつかまへて話しかけた。

「あんた方は、何つちで御ざんすのえ？」いつも、第一にかう言つて他人の住所を訊ねるのであつた。そして、その答えを待つて、いろく面白いやうな話題を引き出して来て話した。その人の住所々々によって、上手に兵太郎は話題を持ち出して来るのであつた。そして、他人が怒るやうな事は一つも言い出さなかつた。話題が切れると、彼は陽氣な聲で「南無大師遍照金剛。」に一種の節をつけて叫びだした。そしてそれにも倦いて来たと、三吉に話しかけるのであつた。

二人は他の順禮からは遠くかけ離れて、山路に這入つて行つた。

兵太郎は三吉が面白いだらうと思はれるやうな事を話しながら行つた。が三吉は、面白がらなかつた。そして、時々ちつと立ち止まつて、自分の通つて来た道を見つめたりした。

小さい、ひねくれた松が生えてゐる峻しい山路を登ったり下ったりした。兵太郎の語るところによると、山路に這入ってから次の庵まで二里あるといふことであつた。道が少し廣くなつて、下りかけると家が見えた。併し家が見えるとなほ淋しい——丁度二十軒ばかりある村で、一つの社會をなしてゐて、他の社會とは交通の出来ない——のけものといふやうな感じのされる處であつた。

山路に這入つてから、一つも他の巡禮に會はなかつた。三吉はしみじみとした感じを覚えながら、谷のくぼんだ處の門かどに入つた。庵は古けて雨戸などは水ぼてになつて、朽ちかけてゐた。

庵の本尊の眞正面から少し曲つて入りこんだ處に老媪がゐて、盆に盛つた小豆飯をくれた。二人はそれを食つて、老媪が湯呑茶碗に注いでくれた番茶を飲んだ。そして少しの間腰掛によつて休んだ。兵太郎は煙草を出して吸つた。

そこへさきの女のひと組が来た。そして老媪から同じく小豆飯を買つた。三吉は女が盆に盛つた小豆飯を食はずに、彼女の小さい辨當行李に入れてゐるのを見とめた。「あんた方はどつちでござんすのえ？」と兵太郎はいつも言ふ言葉を繰り返して訊いた。「神戸ですの。」

三吉が、前に會つた事があるやうに思はれる女が答へた。三吉は、女の聲が彼れの想像してゐたやうな聲ではなかつたのに氣がついた。彼れは、前に戀してゐた女、(H子)のやうな細い美しいそしてよく響き透る聲で、それになま一段洗練を加へたものだらうと(そんな事まで)想像してゐたのであつた。が、實際は、太くかすれて、疲労をあらはしたものであつた。併し、無邪氣であつた。

「今朝は何處をおたちでしたのえ。」と兵太郎は訊いた。

「十八番の庵から始めましたんです。」他の女が答へた。

「そしたら、早いぢやありませんか——女の足にしては。私等もあしこから始めたんでやすが、私等と同じだけ歩



いとるぢゃありやんか。」

「いゝえ、早いことはありません、女の足ではん、ぽつ／＼です。」年の行った女が言った。——丁度、表面では兵太郎の言ったことを否みながら、裏では自分等が割合早く歩いてゐたのを喜んで居るやうな調子で。

女の組と、これだけの言葉を交はして、二人は庵を出た。そして、細い急な道を登った。

三吉は、女が昨夜彼れが泊った木賃宿の近くの宿に泊つてゐたのだなあとと思った。そしてその前の夜は、自分の村で泊つたのではあるまいか、と思った。それから、また、あこの二里もある山路で彼等と僅か距つた、ばかりで、女が来てゐたのだと考へて、あれやこれやと思ひ合せてみると、なんだか、ある豫感があるやうな感じられた。併し、すでに、自分には日子といふ女があるのだと思ふと、そんな豫感などは馬鹿々々しくも思はれた。

兵太郎は三吉が何んな事を思つてゐるのか考へてみなかった。そして自分の若い時分のことを話しかけた。

「なにしろ己が若い——二十才はたちぐらゐの時分にや面白い事をやったもんどや。」と兵太郎は歩きながら言った。「女の許へ通ふて居ると、次第に關係が深くなつたんぢや。でその自分にやまだ兄貴が生きて居つたもんぢやから、己に養子に來いと、女がいふんぢやないか、『お前は次男ぢやから來ても良からうが』と言ふて、まぜるものぢやけれど、親爺に言ふたら怒られるんに決つて居つたもんぢやから養子にや行かむ。『どうしても行かむ』と言ひ張つたんぢや。そしたら、今度は、二人で何處か他所へ行かんか、と言ひだしたんぢや。それで、己が晩に行くと女は、今夜、汽船に乗らんかと言ひ出すんぢや。『ぢやけど、今に今といふて行けやせん。いんにやまあ、明日まで待て、そしたら行くせに。』とか言ふてまあその晩は逃れたんぢや。なにしろ、二人が飛び出して行つた處で、どうせ、また戻つて來にやならんのぢやせに、と思ふて、己りやすば抜けてやらうと思ふつたんぢや。それで、その明晩にや行くまいと思ふて居つたんぢや。もう家で早やうに寝てやらうと思つて居つたんぢや。そしたら、女が手紙で、どうでも來いと言ふて來たもんぢやせに、家で寝て居ることも出來ず、まあ女の家へ行つたんぢや。——女の家

方へ行つきよると、女は早や己を呼びに来て居るのぢやないか。それで女は本眞劍ぢや、貯金してあった六十圓も出して来て居るし、着物やかいも、ちゃんと荷造りして汽船問屋まで持って行って置いてあるんぢや。と言ふんぢや。ぢやけど、己りや飛び出しぢやならむと思ひ決めとったもんぢやせに、『いんにや、行かん。』と、腰を据えたんぢや。なにせ、飛び出して行ったりしたら、村の人に笑はれるものぢやせに、そいつが恐ろしかったんぢや。そうして、路の脇の陰かげってに這入って、女と話して居ったんぢや。そしたら、大けな男が、泣きながら通るぢや。女がそれを見ると、『家のお父さんぢやー』と呼ぶもんぢやせに、己も恐ろしくなっただんぢや、ひよっと、大けな男にでも、ひつかまへられたらつまらんと、思ふて、すぐ逃げて戻ったんぢや。それからもう、村の人の評判せられたら、いかんと思ふて、女と縁を切ってしまうたんぢや。足許の明い間に用心したもんぢやせに、まあ、村の人に悪い評判はせられずにすんだんぢや。……………」

兵太郎は、こゝまで話して来ると、行きがゝりで、その後二三回も他の女と戀した事も話して聞かさねば、すまぬやうに思った。そして、それらのことも話した。——心の一面では、巡禮になつてゐながら、こんな色情の事を話すのは悪いと思ひながら。

三吉は、兵太郎が感じてゐるだけの、面白味は感じなかった。兵太郎が調子に乗って話してゐる様を見ると、冷笑してやりたいと氣持がしたりした。

山路が少し下り坂になつた時、そこに、庵があつた。

「比處が、『風穴かざあな薬師』といふ庵ぢや。この石穴にや、いつでも風が吹いて居るんぢや。手をやってみろ、淨い風が来て居るぞ。』

兵太郎は、陰氣に俯向いて居る三吉にかう言つて、庵の右側の崖の石穴を指した。石穴は多くの巡禮が手を入れ、てみるらしく苔などは生えてゐるに、磨けてゐた。そして穴の傍には賽銭や米をそな供えへてあつた。

「この石穴の奥は、何んなになって居るんか分からんのぢや。風が吹き込んで居る處はないのに、この穴からは吹き出て居るんぢや。」と、兵太郎は言ったが、三吉はそんな事には注意しなかった。そしてそれを不思議だとも思はなかった。

兵太郎は、陰氣になって、話しかけても、ろくに返事もしない三吉を齒痒ゆく思ひながら、自分が先になって早く山路を下った。

二人が坂路を下って行くと、老嫗や、六十歳近くの老人や二三人の若い女と合せて三十人ぐらゐの巡禮が、ずっと細い路を續りて下って居るので、その巡禮を追ひ越して行くことが出来なかった。で、二人はその後からついて行った。

「お爺さん、隣同志ぢやな？」と兵太郎は微笑しながら、すぐに彼れの前を行って居る老人に言った。

「お前はらは、何處でやす？」

老人は振り返っていぶかる眼で二人を見つめた。その先の老人も振り返った。

「お爺さん、安田村でせう？」

「あゝ、安田ぢや。」

「下村ぢやないのか？——お前は。」

後から三番目に行つて居る、腰に草鞋をさげてゐる老人が振り返って言った。

「あゝ下村。」

「そんなら、隣同志ぢやなあ。」

彼等は、隣り村に住んで居るのであった。それを、『隣り同志』と言つたのであった。

「お爺さんたちは、大勢ぢやなあ。……よるで、幾人あるんですか？」と兵太郎は言った。

「二十八人組ぢや。——ぢい・やば・や娘やませでっぢやで。」

「二十八人もかいの！ そりや賑やかで良いの。己ら、たった二人ぢや。」

「二人か。そりやちょっと少な過ぎる………後の若い人は何處の人ぢや？」

「若いしか、これは、家の隣の息子ぢや。」

兵太郎は自分の兄が安田村の人と関係があったことや、親切に交際してゐた人があったことなどを話しながら歩いた。

草鞋を腰にさげて居る老人は、兵太郎を見ながら、

「お前は、先日こないだの牛市で牛を換えへた人ぢやないかいな？」と言った。

「あゝ、さうぢや。」

「さう言や、あの赤色牛あかべと換へたんは、この人ぢやあつたんぢやなあ！」他の老人は、笑ひながら言った。

それから、兵太郎は、牛のことを次へ次へと話し合つた。老人も調子に乗つて、牛には何を食はせたら良いとか、如何なる形態の牛が良いとか話し合つた。

それから、二人は夕方まで、その巡禮と一緒に歩いた。

木賃宿に泊る時にも兵太郎は、好んで大勢の組と一緒にゐて、宿に就いた。

#### 四

翌朝、二十八人の巡禮に、兵太郎と三吉との二人を合せた三十人の一組は、二た組に分れて、西の瀧庵に登る険阻な道についた。一組は普通の巡禮が登って行く道筋を取って歩んだのであつたが、他の一組、普通の者が行く道を逆に取って行ったのであつた。そして、西の瀧庵から下つて来た處で、また二た組が一緒になつて、中山街道を

越えて行く筈にしたのであった。

三吉は、道を逆に取って行く組についた。

「三吉、こっちの道から行く方が良いぜ。逆道を取るよりや順道を取る方が、あたりまへぢやぜ。」兵太郎は、三吉が逆の道を行く組について行かうとして居るのを見て言った。

「えゝ、」と三吉は言つて、「ぢやけど、やっぱりこっちから登らう。」

三吉は兵太郎の言ふことを聞かずに、逆道を取った。

「さうするかい。そんなら己らも、お前と一緒に行かう。」

兵太郎も三吉の後から、逆道を取って来た。

道は細い急な、石ごろで雨が降った時には溝のやうに水が流れさうにほれかへつてゐた。そのために、庵から下つて来る巡禮と登つて行く巡禮とが互に注意して道を譲り合ふようにしなければ通り交つて行けなかつた。

三吉は庵から下つて来る巡禮を残らず見ることが出来た。彼れは、昨日會つた、鼻と唇との間に深い單純みを持つて居り、眼つきのすがくした、丁度、ヴァイオリンを聞いて居るやうな感じのする——あの前に見たことがあるやうな女を再び見ようと思つて、下つて来る巡禮を一々注意してみた。

三吉が昨日、淋しい庵で女の太いかすれて疲れたやうな聲を聞いてから、夕方まで女に會はなかつた。彼れは、兵太郎が大勢の巡禮について行くのを嫌らなく思ひながら、ただく振り返つては、あの女は来てゐないかと思つて見つめた。そして夕方になって、宿につく時には、うるさい二十八人も組と分かれてしまはねばならぬと考へてゐた。そして、若しあの女の組が泊る宿が分つたら、自分らもその宿に泊つてやらうと思つてゐた。そして、陰氣な彼れは早や様々な空想をほしきまゝにしてゐたのであった。夕方になって、三十人の者が寺院で詠歌をすませ、それから宿につく、と言つて暫らく腰掛によつて休んで居ると、さきの女がその寺院に來た。そして、女の組

はその寺院から次の庵の方へ行つた。三十人のものは次の庵へは行かずに、すぐ宿についたのであった。……  
 「この西の瀧庵に登る道で、あの女に會はねばならん筈だ！」と三吉は思つてゐた。殊に彼れが逆道から登つてゐるので、間違ひなく會ふ可き筈であつた。

併し、實際には出會さなかつた。三吉は、女は必ず先に行つてしまつたのだと思つた。

西の瀧庵から下つて、三吉などの居た組は寺院で他の組を待つてゐた。その寺院の本尊の彫刻は國寶となつてゐたので皆な注意して見た。他の組の者が来てからに、詠歌を唱へはじめた。

三吉は、便所へ行くやうな風をして、そつと寺院の門を出た。そして次の庵では「お札」も納めずに、ただちよつと頭を下げたゞけで中山街道を急いだ。中山街道は縣道になつてゐたので平かであつた。彼れは出来るだけ早や足に歩いた。併し走りはしなかつた。走つたら注目せられて見つけられると思つたからである。そして、また、道を歩きながら菅笠をぬいで手に持つて歩いた。兵太郎に見つけられたら……と氣にかゝつたが、彼は若し見つけられたら、なんとか言つて、うまく偽つてやる考へでゐた。

やつこのことで、街道の山際まで来た。三吉は、ちよつと、後を振り返つて見て、また歩き續けた。街道の兩側は松が生えてゐた。

ほつと息づきながら三吉は隧道に這入つて行つた。薄暗い隧道を出ると、人家が見えた。三吉は、先に行つて居る巡禮を注意して見ながら、道を間違へないように、行つた。

次は寺院であつた。三吉は巡禮に注意しながら寺院の中へ這入つた。そして「お札」箱の傍に坐つてゐた。寺院の守人らしい老人に懇懃な態度で訊ねた。

「おばあさんが二人に、若い娘が三人で一と組になつて居る方を見ませんでしたか？　そしてそれは、お納經を戴

いて、行って居るのです。」

「あゝ、そんな人も通ったでせう、おばさんが二人に、娘三人。そんな人も通ったでせう。なにしろ、一日に六百人も巡禮ぢやから、一々覚えて居れりやしねえでさあ。」

「ほんとうに通りましたか？ 六十過ぎのおばあさんと、二十才はたちぐらゐの娘とで五人ですが……神戸の人です。その人は。」

「通りやしたでせう。しっかりしたことは、言えんけど。」

「さうですか。どうも有難う。」

三吉は、すぐ寺院を出て、先へ行かうとした。

「あゝ、これくお前さん。」と寺院の守人は言つて三吉を止まらせた。「そっちへ行かずにこれを東へ行ってみやせ、お饅頭のご馳走をくれますぞ。」

守人は東の門の方を指さした。併し、三吉は、東へは行かず、「指教一杓」のある方へ急いで行った。そして、先に行つてゐる巡禮を追ひ越し、追ひ越して行った。

彼れは、庵へ行つても詠歌を唱へずに、たゞ「お札」を納めて賽銭を投げては、女の巡禮に注意して先へ先へと行った。併し、女には會はなかつた。

三吉は、寺院の守人に訊ねた時に、女が何時頃に、通つたのかを訊くのを忘れてゐた事に氣がついた。で、或る庵に行つて、再び訊ねた。

「もし、ちょっとお訊ねしますが、あのう、六十過ぎのおばあさんが二人と、若い二十才はたち恰好の娘さんが三人で一と組の方が過つたのを見ませんでしたか？」

「えゝ！ どんな方が？」と庵の坊主は言った。

「六十過ぎのおばあさんと、若い娘とです。それで五人連れです。何時頃通ったか、知りませんか？」三吉は、おどくししながら言った。

「おばあさんと、娘とかい。そりやいつでも通って居るでさあ。今さっきも通ったし、また、今からでも、来るさあ。——ばあさんと娘となら珍らしかあねえさあ。いったい、お前さん、その娘と、おばあさんを、どうするといふんぢやい？」

坊主は皮肉な調子で言った。「今日九時頃に、通ったのを見やしませんでしたか？」と三吉は言ったが、その坊主に訊いても本當の事は言はないと、氣がついたので、すぐ庵を出た。

次の庵で、また三吉は訊ねた。彼れは自分の妹か、或は同じ組の者の行く先を、必ず探し出さねばならぬ、といったやうな熱心さで大膽に訊いた。その庵には、尼女あまがゐて、くどくど、言葉數は多く答へてくれたが、一つかう要領を得なかつた。

「あの娘さんの組は、——上品な娘さんでござんしたあ、ぢやけど、一人の娘さんは海夫あまの娘のいうに、生なまぐさでござんしたあ。あの三人娘さんたちは、他人同志でござんしたあぜ。おばあさんの子は、居りやしませんでさあ。あの五人の中で親籍同志はたった二人でやすぜ。その外の者は皆姉妹でも、従姉妹でもなんでもない方でさあ。さうでござんせう？ あんたも、あの娘さんがたと、一緒においでたのですかい。——こちらを巡っておいでるのは、初めてでござんせう。初めの方は、賽錢を澤山に投げてくれるので、すぐ解りまさあ。」

尼女は、(利己的な女によくある、)自分の思ったことをばかり言って、三吉が訊ねようと思つて居る事は言はせなかつた。

「それで、その娘は、何時頃通りましたか？」

三吉は、尼女がまだ續けて、自己の思つて居る事を言はうとして居るのを、さへぎつて訊いた。



「今さっき、できあ。うちの庵でちょっとした間休んで行きましたあ。辨當を食べて居らんので、『うちの庵でおあがり』と言ふてあげたのですげと、先へ行きましたあ。」

三吉は尼の言った事が眞實であつてくれ、ば良いが、と思ひながら急いで歩きだした。細道を少し行くと道が開けて、そして下り坂になつてゐた。下り坂両側には櫟樹が生えてゐたので、よくは見えなかつたが、處々を行つて居る巡禮を上から認めることが出来た。彼れは、坂を下つて行つたが、女には會はなかつた。併し、尼女が彼れを欺いたのではないと思つた。尼女はぢつと庵に坐つて、澤山の巡禮が来るので、頭が混乱して女が何時頃に通つたのか、明確に記憶してゐなかつたのだと思つた。そして、すべて庵の尼女や坊主は、特徴のある目立つた、巡禮をいつも新らしく記憶してゐながら、其他の巡禮はすぐに忘れてしまうのだ。だから昨日通つた巡禮でも目立つて深い印象を残したものは、今日通つたやうに思はれるのだ。とこんなことを考えへた。

三吉は、自分が熱狂的になつて居るといふ事に氣がつかなかつた。そして、たゞかうして行くのが眞に自己の眞生命に生きて居るのであると思つてゐた。それが妥當であるか、如何であるかについては、客觀的に考察する餘裕を持たずして。

絶えず女巡禮の群に注意して、彼れは歩み續けたが、夕方になつても、さきの女に會はなかつた。

夕方になつて、三吉は、寺の守人や尼女に欺かれたのだと思つた。そして自分も、無責任な尼の言葉に乗つて、あまり早く歩み過ぎたのだと思つた。

「なにしろ、まだ女は、こゝまでは来てゐないのに違ひない。何處かで自分が氣づかずに女の先になつてしまつたのだ！」と思つた。そして、彼れは宿につく時になつて、半里あまりの道を後歸りした。後歸りをしながら三吉は宿屋に沿つてゐる巡禮に注意して歩いた。半里あまりの道を歩んで、八幡といふ處まで来ると、日がつつぱり入つてしまつて、暗かつた。八幡には五六軒も木賃宿があつたので三吉はどこかに、女は泊つてゐるであらうと思つた。

——、女が一日かゝって歩いた里程が、昨日十八番の庵から西の瀧庵までだったのに比較すると、今日は八幡まで来て居る可き筈であったから。

六軒の木賃宿の前に立って、一々、女は泊ってるやしないかと覗いてみた。併し、宿はそんなに簡単なものでなかったから、外から見たゞけでは分らなかつた。

三吉は、一番大きな、かまへの木賃宿についた。女がそこに、泊ってるさうに思ったからである。

## 五

三吉は、翌朝、早く宿をたつた。そして、庵へ行った。その庵は、すべて八幡で泊った巡禮が必ず来ねばならぬ庵であつた。

まだ早やかつた。腰掛や庭は露でぬれてゐた。そしていつも、乾びて生氣がない、死人を聯想させる庵も、なんだか生々した氣分を感取する事が出来た。

昨日の「お札」は美事に取り去られてゐる箱の中には、今朝、早く通った巡禮の「お札」が三十枚ばかり入つてゐた。「早や、だいぶ通つたんぢや！」と三吉は思ひながら、箱の傍へ行って「お札」を一々しらべた。「お札」にはそれぐゝ参拝者の住所姓名が記されてゐるので、誰が通つたかを知る事が出来るのであつた。

「神戸市 …………… 齋藤あき子。」

三吉は、かう書いてあるのがあるはしないかとしらべた。——それは女の名であつた。——彼れが最後に寺院で女を見た時に、女が白い藝術家のやうな手で「お札」を納めてゐるのを認めたのであつた。彼れは、女が去つた後、その「お札」を取つて見たのであつた。

「三吉は、這入つて来ては詠歌を唱へて、過ぎ行く巡禮に絶えず注意しながら、丁寧に「お札」をしらべた。

女の名を記してあるのはなかった。彼えは庵の隅で、通り過ぎて行く巡禮に注意してゐた。

昨夜、彼れが泊った宿には、女は泊ってゐなかつたのであつた。宿の小僧が、宿帳を持って来た時に、彼れが、投宿者の人名を見たのであつたが、女の名は見當らなかつた。併し、これだけでは分らぬと思つて、三吉は食事がすむと、他の巡禮が泊って居る部屋を一々覗いてみた。が、やはり女はゐなかつた。

三吉は、庵の片隅の大きな松の下の腰掛に寄つてゐながら、他の巡禮は先へと過ぎて行くのに、自分だけ、かうして、ぢっとしてゐる、氣持悪さを感じた。若し、この場ですぐ女が来たらどうするか？　こんな事が氣にかゝつた。——彼れは、色々な空想をほしまゝにしてゐるが、さて、現實の場面となつては、どうすれば良いか考へてゐなかつたのであつた。

若い、三十恰好の男の巡禮の一と組が、大きな聲で詠歌を唱へて通り過ぎた。その後から老媪ばかりの一と組が来て、よく響き通る聲で詠歌を唱へてまた、行き過ぎた。

「自分は、かうして坐つて居ても良いのだらうか？」三吉は通つて行く巡禮を眺めながら考へた。彼れは、自分が巡禮になつて居るといふ事を強く感じた。「巡禮がかうして居ても良いのであらうか？」

絶え間なしに通る巡禮が、ぢろりと、自分を見るので、三吉はたまらなくなつて、歩きだした。十分間も坐つてゐなかつたのに、もう、一時間も居たやうに思はれた。その間、自分は行き過ぎた、すべての者に印象を與へてゐるのだ。——すべての者は、自分が女を見つけ出さうとして、熱狂的になつてゐたのを讀んで知つてゐるのだ。と三吉は感じて、恥かしい氣持がした。

「どうなりとなれっ！」と三吉は、心に思はず、ひとりでに呟いた。そして、自分の前に、くづれかゝつて来て居るものがあるのを感じた。

彼は、もう、努力して女を見つけ出さうとは思はなかつた。が、自然に女と出会つたならば、大膽に自分の思つ

てゐる事を言つてやる。と思つて、淡い期待を持ちながら歩いた。併し、自分が、のろ／＼した、黒い重々しい氣分に執はれてゐるのを感じない譯にはいかなかつた。

## 六

老人や老媪や、娘が集つて一組をなして居る巡禮團は、國寶を藏めてある寺院で、詠歌がすむと、田の畦道を、通りながら、互に、自分が先にならうとして、老媪や老人までが近道を取つて走り足に歩いた。そして、自分が先になると、聲をあげて笑ひ／＼した。

「また、先になりやがつた。」と、老媪は、ぢやうけた調子で、狭い畔道を、ひよくひよくと走つて一番先になつたりした。併しすぐ疲れて、競争はやまつてしまつた。

中山街道を通りかゝつた時には、一組の者は散り散りになつて、それ／＼四五人宛のかたまりになつた。そして他のかたまりとは一町も離れたり、或は接近したりして雑話にふけりながら、ぼつ／＼歩いた。——一番先に行つて居る者と、一番後を行つて居る者とは二町も離れながら。

一組が、五六ヶ所の庵や寺院を巡つて、「山の観音」へ来た時にはもう正午を過ぎて居た。「山の観音」では本尊を開帳して、参拝者に見せてゐたので、本尊の前は、巡禮でびっしりつまつて居た。巡禮は、本尊を長い事見て、動かなかつた。その後へ、次から次へと巡禮が来た。そして、珍らしがって本尊を拝した。賽銭が／＼と箱の中へ飛びこんだ。「この観音様の御本尊は、三十六年目ぢやなければ開帳は致しません。さあ、おがんでおいでなさい。」

と守人は大きな聲で言つた。

「こちらへおいでなさい、お供者をお頒ちしますよ。」一方では机に向つて居る男がかう言つた。巡禮は、絶えず

動いてゐた。續いて蠟燭をあけて貰ふために、一錢銅貨を投げ出した。

「子の年の男、家内安全、蠟燭一丁」

これだけの言葉を、坊主は、高らかな聲で長く引っぱって、さも観音様はあり難い。といったやうな調子で叫んだ。そして、鐘を、「があーん」と一つ鳴らした。鐘は續いて響いた。三段になつてゐる蠟燭立てには、火が三列になつて、燃えてゐた。

本尊を開帳してゐる處を通りぬけて、石段を少し登ると、地藏尊があつた。地藏尊への處から石段を下ると、綺麗な清水が流れてゐた。そしてそこには、おかずや、菓子賣つてゐる小屋掛店があつた。

一と組の者はそこで辨當を食べた。——開帳の前で永い事を見てゐたものだから、二町も後れてゐた者も追ひ付いて、全部一緒になつて。

「うちの息子は何處に居るんかいな？ お爺さん、うちの息子を知らんかいの？」

兵太郎は三吉が居ないのに氣がついて、傍にゐた、老巡禮に尋いた。

「息子って？ ……あゝ、あの若い子か。 ……さっきから、見んぜ。」

「何處へ行つたんぢやらうに？」と兵太郎は習慣的に呟いて、「お前ら、うちの息子を知らんか？ うちの息子を」と、大きな聲で人々に訊いた。

「あの若い子か ……どっかで見たけど ……いや、知らんぜ。」

老嫗らは、ちやくこちや、しゃべりあつたが、結局は知つて居る者はなかつた。

「お前ら、ほんまに知らんかい？」と兵太郎は念をおして訊いた。

「西の瀧庵から下りて来た處の寺院から先になつて来てしまつたんぢやらう——まだ詠歌をまうして居るのに門を、かけり出よつたせに。」

と、若い女が小さい聲で言った。

「ほんまにかいや？ お節よ。」傍の老媪は訊きたゞした。

「はあ。」と女は言った。女は、詠歌を知らなかったのも、他人が詠歌を唱へてゐる間、ちろくくと老人の口が動いてゐるのを見たり、三吉の面を見たりしてゐたので、三吉が走り出てゐたのを知つてゐたのであった。

「どうするとして、先になつて、走つたりしたんぢやらうか。」と一人が言った。

「うむ。……ぢやけどなんぼ先になつて、走つたとして、走り續けられるぢやなし、どこぞで出會ふか、先を行つて居るのを見つげにやならん筈ぢやで……。」他の一人が言った。

「ぢや、ばやのより集りぢやせに、一緒に歩くんが嫌で先になつて走つたんぢやないんか。たいがいさうぢやぞ。……ぢやせに、もう先の先の方へ行てしまつて、見もどうも出来やせなんだんぢやあらう。」

一人の邪推深さうな老媪はかう言つて、他の老媪の顔を見た。

「いや、そんなことはない。年寄りばかりぢやないんぢやもの、——若い娘ぢやつて居るぢやないかいの。」と兵太郎は、三吉を辨護するやうに言った。「なにせ、もう、ちょっと、先に行つて居るのにや違ひない。もう一と足で追ひ付くぐらゐるの處を行て居るぢやらう！」

「さうじや。そのぐらゐるの見當ぢや。」

老人の一人は言った。

「己ら、追ひ付いてやらにやならん。」と兵太郎は言った。「先行て、あれに追ひ付いてからお前らが来るまで待つて居るせに……。」

「先行つたりして追ひ付かんとて、一緒に行つたとして、上等追ひ付けるぜ。」

「え、ぢやけどまあ、行てみや。」

「子供かなんどのやうに、行ってみたりせにや、だいしかしい。」

「子供ぢやないとて、ひよっと魔にでもとつかれとるやら分らしねえぜ。」

兵太郎はかう言ひながら笑った。併し、彼は、口に出してこそ言はなかったが、一緒に村を出てゐながら、分らなくなつた者を放うたらかして置いて、一緒に村へ歸ることが出来なかつた時に、困ると思つたからであつた。

「息子ぢやせに大事なか、はゝゝゝゝ。」

「いや、そりや行てみるんが良からう。お前一人ではなんぢやせに、己らも一緒に行かう。」

老人の一人は眞面目にかう言つた。

兵太郎と老人（五十五ぐらゐであつたが、元氣な、足の達者な人であつた。）とは、すぐ、他の人々と別れて、急いで出かけた。

兵太郎は、庵へ巡て行く毎に、その坊主に話しかけた。

「坊さん、若い、——今年で丁度二十才はたちになる——男が通つたんを見なんだかい？——緋の着物を着て居る、ちよつと細てな、色白の男ぢや。」

と、兵太郎は或る庵へ来た時にかう言つて訊ねた。その坊主は、一流ある、邪慳さうな眼持つてゐる、六十男であつた。

「あゝ、通つた。」

「もうその男は、何處らへんまで行て居る見當でやすかい——つひそこぐらゐでやすかい？」

「そんな事あ、分りやしねえぜ。なにしろ、その男かあ、急いで、とばかりして歩いたあぜ。」

と坊主は、ごつくした調子の聲で、早や口と言つた。「わあしに『六十恰好のおばあさん二人と、二十才はたちになる

娘、三人とで一と組になって居る組が通った人を知らねえか』って、早口にぴこくしながら訊きやがって、また、『今日九時頃に通ったんを見やしませんでしたか?』とそれこそ、ぴこくしてしゃべって置きながら、わあしに『あり難う。』とも言はずに、走って行きやがったあぜ。」

「坊さん、そりやほんまかい?」

「ほんまぢやねえ、と思ふなら、なんちやわあしに訊かねえがえぢや。」

坊主は、すぐひねくれた。

「いや、そのう、坊さんの言ふをがほんまぢやないと言ふんではないが、私らが訊いて居る若者と、坊さんの言ふ若者と、人違いひぢやないんかと思ふて……。」と兵太郎は、坊主を怒らせないやうに、柔らかく言った。

「人違ひぢやかは分らねだが。」坊主は、ひねくれが直って調子に乗って言ひ出した。「なにしろ、あの若者は、娘さんに惚れて居ったんにや違ひねえ、わあしは、あいつに、白状させてやらうと思つたんぢやけれど、あいつめ、走って逃げて行たあ。……お前さん方は、あの若者を探して居るんかい?」

「坊さんの言ふ若者と、私らの追は、へて行つきよる若者とは、そりや人違ひぢや。」

兵太郎は、心の中では全く人違ひだ、とは思はなかつたが、坊主にはかう言つて、話を切つた。——變骨な坊主が、悪い話しを持ちかけて来るのを恐れて、

「面白くない話しぢやないかい?」

庵を出ると、老人は兵太郎に言った。

「はあ……。」

「ほんまに、そりや人違ひですかい。」

「さあ、はっきりは分らんけれど……。」



兵太郎は、實際、人違ひであつてくれゝば良いが、そして、すぐ近くに三吉が居てくれゝば良いがと思つた。「七分——八分までは、人違ひであらう。そんな馬鹿な事をする男ぢやねえから。」と老人を安心させるやうに言つた。

庵から、庵へと、二人は若い男に注意して歩いたが三吉を見つけ出す事は出来なかつた。

老人は、「人違ひぢやなかつたんであらう。あの、ごつく坊主が言ふたんがほんまぢや！」と言つた。

「ぢやけれど、あの男がそんな馬鹿な事をする筈がないんぢや。——内氣な男ぢやのに、も早や許家もある身體ぢやせに、よその娘に惚れてついで行つたりする譯は、ちつともないんぢや！」と、兵太郎は、三吉を悪くて言つてしまひたくなかつたのでかう言つた。

「さうかい、早や許嫁があるんかいな。」

老人も、兵太郎が三吉を辨護するので、人違ひであつたのかどうか、迷はされた。

二人は、夕方まで三吉を探して歩いた。夕方近くなって、兵太郎は八幡まで来た。二人は木賃宿を一々たづねて、みた。

「もしこなたに、河上三吉といふ二十才はたちになる男が泊つて居りやしませんか。」

六軒の木賃宿へ這入つて、訊いてみたが、三吉はゐなかつた。

二人は北山まで引返した。——つひしたら自分らが見逃してゐて、後の者と一緒になつてゐるかも知れないと思つたりしながら。北山まで引き返して、他の人々と一緒になつたが、やはり三吉はゐなかつた。兵太郎は三吉が、昨日よく出會つてゐた老嫗と娘の組について行つたのだと思つた。併し彼れは、大勢の者も前では、「行き違ひになつたんぢやあらう。明日になつたら見つけられるだらう。どっちにしる、此處から一里も二里も離れた處に泊つ

て居りやしねえ。」と言って、三吉を辨護した。

翌日、兵太郎は他の人々よりは一町ぐらゐる先になつて歩きながら、若い男女が連れだつてゐるやうな組に注意したり、男が一人歩いて居るのに注意したりして、三吉を見つけ出さうと努めた。

「お前さん、そんなにまでして、探さないでもえゝよ。」と、他の人々は、庵で兵太郎に追ひつくと云つた。「もう二十才はたちにもなつて居る男ぢやもの心配するにや及ばねえよ。——そりや放つたらかして置いたとて、ひとりで見出されるぢや。——その、佛様のおかげといふものがあるによつて。」

「あゝ、さうぢや、佛の御利益ごりやくがあるせに、そりや、見出されるとも。——御利益ごりやくがあるにや定まつて居るさ。——その御利益ごりやくといふものがないんであつたら、こんなに巡禮になつたりして歩かいてもえゝぢや。」と、他の一人が合槌を打つた。——半ばは、笑ひながら。

兵太郎は、佛の利益があるだらう。と言つて放つたらかして置く譯にはいかなかつた。——殊に、三吉が女巡禮の組に連れだつて行つてゐる居るのだつたら、どんなことがあつても探し出して、一緒に連れて歸らなければ村の人々に對して自分の面目がたゞないと思つた。——「若い男が女について行くのは、あたりまへの事だ。年上の者がそれに意見をして、引っぱつて戻らぬといふのが間違つて居る。」と、村人に言はれるのを恐れた。そして彼れは、組の人々よりは二町ぐらゐる先になつて歩きながら、絶えず若い巡禮に注意してゐた。

## 七

三吉は、「笠ヶ瀧庵」へ登る急な細道をたどつた。

「十八町のえらい道を登つてまた此處へ下つて来ねばならんのですからに、お荷物は、置いておいでなさい。」と茶店の主婦は繰り返して言つたが、彼れは鞆を置かずに、肩にかけたなりで登つた。彼れは、ぽつ／＼しか歩かな

かった。他の巡禮は彼を追ひ越して行った。「女が一里先に行つてゐるとしても出會す筈だ。また、一里——否一里以上——後から来てゐるとしても出會す譯だ。」と彼れは考へた。そして、彼れ自身で元氣をつけながら、わざと、ゆるく登った。——後を見たり、先を見たりして巡禮に注意しながら。

三吉は、庵へ登ってから、そこで辨當を食べようと思った。そしてなるだけゆるくして、時間を過ぎさせて下らう、と考へた。

「それでも女を見つけ出す事が出来なかつたら運命だ！」と、三吉は呟いた。

庵は北に面した、日陰地の深く静まり返つて居る處にあつた。巡禮が詠歌を唱へたり、鐘を鳴らしたりしても、その静けさは破ることが出来ないやうな大きな静けさであつた。大きな枝が茂つてゐた。——谷の深いく處までもずっと續いて。大きな高い岩が、空中に突出してゐて倒れかゝりさうになりながら庵の屋根を蔽ふてゐた。嚴として。

三吉は辨當を食つてしまうと、また今朝のやうな氣分に襲はれた。

——どうしてかういふ氣分になるのか、彼れ自身にも分らなかつた。——ちっと坐つて居るのがたまらなかつた。絶えず動いてゐなければきまりが悪く感じられてならなかつた。

尼女がどう思ふが、他の巡禮がどう思ふが放つたらかして置けば良いのだ。——そんな事氣かけてゐちやいけない。と、自ら自分をはげまし、力ずけた。がやはり居たまらずして、庵のかどを歩きまわつたりしてゐるが、間もなく下り道についた。(彼れが後になって、その時を顧みると、周圍が静かであつたためと、女が自分の戀をはねつけてしまった時には如何になるだらうか? の豫想が——明確な豫想ではなかつた。殆んど考へないぐらゐの程度に於けるものであつたが——暗々の中に影響してゐたやうに思はれた。)

「麓まで下つたら、もう自分の運命は決するのだ。」と、彼れは下りながら考へた。——或る神秘が在つて、それ

にはづれる時に、全然物が破壊してしまうかのやうな、観念に執はれながら、彼れは運命を決定してしまうのが恐ろしかった。また、いつその事で、早く決定してしまひたい氣もした。

彼れは女に會はずして麓まで下つて来た。そして、兵太郎に出會した。——彼れにとっては、意外な。——そして、公平な眼で見れば必然の中にも必然な。

「三吉！ 此處に居るんか。」

「はあ。」

「登つてすんたんぢやない？」

「はあ。」

「己ら、お前を一生懸命で探して居つたんぢやぞ。」と兵太郎は興奮して言った。がすぐあまり、きつく言ひすぎたと思つた。彼れは三吉が、女と連れだつてゐなかつたので、はりつめてゐた息をほつと吁き出すと共に、きつく言ふ必要はないと思つた。そして、きつく言つたのが三吉の感情を害しはすまいかと思つた。

後から、どやくくと組の者がやつて来た。

「あゝ、到頭見つけた、見つけた。」と、遠くから叫びながら。

「お前さんどうして居たんぢやい。兵さんは、心配して探しまわつたのに！」と、口々に言つた。

「昨夜は何處で泊つた？」

「何處ぞの娘とでも一緒に泊つたんぢやわい。」

と、皮肉な老人が笑へるやうに言つた。笑ひながら。

「お前は、茶店で待つて居れよ、己らゝは登つて来るからに。——先へ行かずに待つて居れよ。ちつとの間ぢや。」と、兵太郎は熱く言つて、組の者と、「笠ヶ瀧庵」へ登つた。

三吉はもう駄目だと思った。——美しい眼と、單純な唇と、少しかすれた聲を持つてゐる、貴い、そして得難い女と永久に切り離されてしまったやうな氣がして、しみじみとした果敢ない氣持になった。彼れは、女と永久に切り離してしまつた原因を、今になって、兵太郎や、祖他組の者に、七分も八分も歸しやうとした。そて彼れは、兵太郎が如何に感じて自分を一生懸命で探しまわつたりしたのか分らなかつた。そしてなほ、復立たしかつた。

彼れは若し女が来たら、兵太郎などは放つたらかして置いて行かうと思つた。そして、やゝもすると、ぐつたりしてしまひさうになる自分に力づけながら、茶店で待つてゐた。併し、なんだか、果敢ない氣持になりさうになりさらになつた。

組の者が下つて来ると三吉は、彼れが逃走してから、兵太郎が探しまわつた事について聞かされた。彼れは、大勢の者の前で腹立て、ぶり／＼する譯にもいかなかつたので素直に聞いた。そして兵太郎が、村人に、云々せられるのを恐れて彼れを探しまわつたのだと、分つた。——尤も、兵太郎の氣分や、立場についての細い事などは、分る筈がなかつたが。

兵太郎は、彼れが眞劍になつて三吉を探した時の、はりきつた、そして多少苦し味が(注3)つた氣分を忘れてしまつたかの如く、樂さうな態度で、探して行つた荒い筋を話した。さうして面白さうな場面は大きく誇張して言つた。そして、三吉に言つてはよくないやうな事——(注4)變骨な坊主の言つた事や、三吉が女について行つたのではないのか、と思つた事など——はぬかして話さなかつた。

そのために、三吉は彼れが女に追ひ付くために逃走したのを、兵太郎や組の者が知つてゐるのに氣づかなかつた。兵太郎は知つてゐない。と三吉は思つた。がそれにすると、なんだか空虚があるやうに感じられた。どうして兵太郎が自分を探したのか、その理由が十分解らなかつた。(後になつて、知つたが。)そして『要らぬ苦勞をして、他人(ひと)にまで迷惑を掛けやがる!』と腹の中で思つた。

兵太郎は、三吉が、『氣の毒ですみませんでした。』と言はないのが、多少以外に感じられた。併し、彼れはそれを面には表はさなかった。

## 八

三吉は、組の者にまじって歩きながら、時々ぐったりとして泣き出しさうな氣持になった。また彼れは、腹が立つて来て、誰れでも手當りしだいに、打ちなぐってやりたい氣もした。——そして、金剛杖で路の面を、ぐっとついたり、路傍の草を打ちたくたりした。——女と切り離してしまつて、見つけ出す事も出来なくしてしまつたのは、恰もこの路や草のせいかのやうに。

『自分には、すでにH子といふ女がある。』と、彼れは、考へた。『それなのに、どうして、H子を愛しやうとしないのだらう?……あんな、ちょっと見たゞけの女は、どんな奴やら分りやしねえ! H子を愛してさへ居れば良いのだ!』

彼れは、かうして居てはならぬと考へた。そして自分がでに、自分をもっと冷かにし、靜かな心を持たせて、女の事を思ひ切つてしまはねばならぬと思つた。そして自身に元氣をつけ冷靜にしてゐるやうとした。と、彼は自分でに呟いた。併し、彼れは、H子を愛する氣になれなかつた。もうH子は、彼に對してひとつも魅力を持つてゐなかつた。そしてその更りに、一言も彼れとは話しもしなかつた女が深く心に喰ひ入つてゐた。彼れ自身もそれを感じた。

彼れは、こんな時に女の欠點を思ひ浮べると、よい効力があるものだと思へた。そしてその欠點によって、女を思ひ切つてしまはうとした。『あの女は肺病ぢやないのか。——少なくとも肺病の初期ぢやないのか?……(注5)……聲がかすれて居つたから……』併し女の純な結核<sup>(注5)</sup>黴黴などはひとつも入つてゐないやうな兩頬の光澤はすぐ三吉の

考へを否定してしまった。『あの、淋しい庵で老媪に貰った小豆飯を食はずに辨當箱に入れて居た。……さうだ、胃病!』と思ったが、それも否定されてしまった。……………

三吉は、組の者が歩きなが雑話を續けてゐるのに耳を傾けた。そして、女の事を忘れやうとした。

組の老人は、路傍の大きな岩を指しながら言つてゐた。(そこは、山路へ入った處で、谷から峯へ登つて行く路であつた。)

「余門三郎といふ人は、よっぽと、えらい人だったのだねい、この大きな岩を、谷からこゝまで、引つ抱へて来たんぢや。あの岩に、手の型がついとろがい? あれが、余門三郎の手の跡ぢや。」

「えらい人ぢやねい。」と、他の者は、立止まって、老人のいふ手跡を見た。

三吉は、老人が續けて話して行くのを聞いてゐようと努めた。が老人は、三吉にとって、面白い話しはしなかつた。老人たちがそれ〴〵思ひついた事を遠慮なしに話すので、ちつとも筋道のたつた事は聞く事が出来なかつた。彼れが面白く聞いたのは、余門三郎の岩の話しだけであつた。

三吉は、話し相手が一人もなかつた。

日が暮れるまで、三吉は一言も言はずに歩いた。彼れは、かういふ日が四五日も續いたら、實際やりきれないと思つた。が、一方では、明日はまた明日でどうなりとなるであらうとも思つた。そして、早く巡禮を了へて、もとの生活に歸りたいと思つた。

三吉は、内気な鬱とした苦しい氣分からぬけ出て、子供のやうな——いたづらな——心持にならうとした。彼はあくる日、彼一人で、「南無大師遍照金剛」と陽氣ぶつて、叫びした。

彼れは、畔道や他の者は行かない間道を通つたりした。そして、珍しい草や花が目につくと、山の樹が茂つてゐる中を、をし分けて這入つて行つて取つて来たりした。

組の者は、険しい、崖はなの細道を通って行った。崖は、高かった。その砂土は、ほれ返って壊れ落ちさうになってゐた。そして、所々に一本づゝ、小松や、棘が生えてゐた。大きく土がほれ返って、岩石が露出してゐる處で崖は海に連って、水中から、凸凹した岩を見せてゐた。組の者はさっさと早く、そこを通り過ぎた。三吉は、そこで、長い間立って下を見てゐた。

「あむないぞ。落ちたら死ぬるぞ。」と組の者は言ったが、三吉は、ちっと皆なが行ってしまうまで立ってゐた。そして、組の者が行ってしまうと、彼れは、礫を拾って高い崖の口から投げた。彼れは、左利きであつたので、女のやうに左手に石を握って、不細工な恰好をして投げた。そして、石が海までとゞくと、得意になつて、土の中の埋まってゐる石を掘り出して投げた。そして、三つ石が海までとゞくと、勝ち誇つたやうに、組の者が行った方へ走り下って行った。——つまらぬ、眞似をして居ると思ひながら。

坂道を下って、組の者に追ひつくと、一番後になつてゐる老媪たちが、無常和讃を唱へながら行つていた。三吉は、その和讃を中途からちよつと聞いたので十分にその意味が分らなかつた。が、なんだか深い意味があつて面白さうに思はれた。

「をばさん、まへ度唱へて、聞かせて下さい。」

と三吉は、言つて願つた。老媪たちは再び唱へた。——

「歸命頂禮黒谷の、圓光大師の教へには、人間わづか五十年、花に唱はゞあさ顔の、露よりもろき身を持て、なせに後世を願ふぞ。たとゑ浮世に長らへて、樂み心にくらすとも、老も若きも妻も子も、後れ先だつ世の習い、花も紅葉も一盛り、二十三十の人々も、今夜枕を傾けて、直ちに頓死するもあり、朝だに笑ひし稚兒も暮に煙となるもあり、今日は他人の葬禮を送りし我身も明日はまた、化野鳥部客となる、それを思へば自から念佛唱へねがふべし。」



三吉は、老嫗たちが唱へて行くのを聞いて居るうちに、彼れの、浮々させようとしてゐた心が、靜かに沈ませられて行くのを感じた。そして、彼れは、ある果敢ない氣分と、しみぐとした感じを感じさせられた。……

彼れは、前にもかういふしみぐとした感じを感じた事があつた。彼れの靜かな、心持が、今そのしみぐとした場面を聯想させた。——弟が若死（十二で）した時に、哀れな響のする詠歌や念佛を唱へてゐた、その時の場面である。『朝だに笑ひし稚兒が暮に煙となつたのだ！』と、彼は思ひながら弟が、達者であつた時の姿や、肺炎で悶え叫んでゐた時の事を思ひ浮べた。……そしてある不思議な感に打たれた。——

「あの女と、そっくりだったのだ。」と三吉は心で呟いた。「弟を女にしたら、あの女と一つも違はないやうになる……：あの深い單純さのある唇！ 美しい眼！ 無邪氣な上にも無邪氣であつた聲！ 何とよく似てゐる事であらう！」と三吉は心で叫んだ。

三吉は、巡禮がすんで家へ歸つて、母に、

「弟とよく似た、——それこそ、ひとつも違はぬ人を見た。」と言つた。彼れは、後になつても、弟とよく似た女を自分が戀して、一生懸命になつて探しながら、よく見つけ出し得なかつたのを或る神秘的な力が横たわつてゐたかの如く思はれてならなかつた。

彼れは、三年前に死んだ弟が、自分に會ふために、出て来いて歩いてゐたのではなかつたのか、と思つた。そして、自分が弟を、可愛く思つてゐる、それをもって、弟が現世にあらはれて来てゐたもの——女——を戀したのであるまいか。そして、弟を十二才より永く生かせる力が自分らになかつた、その如く、あらゆる力をつくしてゐながら、女を再び見つけ出す事が出来なかつたのではあるまいか、と思つた。佛力が弟——女——を繰来世へ引っぱつて行つてしまつたのではあるまいか。……彼れは神秘的な、そして因果的な觀念に執らはれた。そして、自分もその因果律や神處力に支配せられて居るのだと思ふと、果敢ない感じが一層強く感じられた。……

「だが、弟が女の姿に化して現はれて来る筈はない。それは、ある一種の偶然の出来事だったのだ。」  
かう三吉は思った。

が、女が弟に似てゐるのが、偶然の事であるとしても、その偶然の事だといふのがなほ女を見失ってしまったのを、口惜しく思はせた。

今まで彼れは熱く女の事を思つてゐながら、その面が、弟のそれとよく似てゐるのに気がつかなかつたのに、今に到つて、それに気がついたのは、良い意味での前兆であらうかと思つた。が、弟が、生きてゐないのを思ひ合はせると最後のひと明りであつたのか、とも思はれた。

## 九

三吉は、自分の運命や、弟の運命や、女の運命について、神秘的な空想に深み入つて行つた。……

彼れは、かうした現實をとり離れてしまった、甚だしい空想にふけて居るのが好きであつた。そしてその空想がどんなに恐ろしい悲劇的な事であっても、彼れ自身はそれによつて快さを十分に享くる事が出来る人間であつた。——たとへ自身が悲劇の主人公になつて居るとしても。

三吉は、自分が純粹な觀照的な眼の所有者になり得て、どんな錯雜した事件でも、ちゃんと、かみ分けてしまふ事が出来る心境に居る、と思ひながら現實に立ち戻つて考へた。

「遠くから離れて見たら、自分はずまり弟のためにかうして巡礼してゐるとは知らずに、而も弟のために巡礼してゐる事になるのではないだらうか。——暗にその意味になつて居りはしないか？」と彼れは非常に冷静な心になり得てゐると思つて、或る満足さを、覚えながら考へた。——普通の者には、何といふ事やら解らぬ事であるのに、彼れは、重大な意義をもつて居ると思ひながら。「だから自分からそれを自覚して、死んだ弟のために盡してやら

ねばならぬ。」

彼れは熱した心が、さめない間に、冷静な人間の假面を冠らうとしてゐたのである。

或る寺院へ行った時に、三吉は、『弟、光雄のため！』と口の中で呟きながら、鐘を續けて三つならした。——彼れは、或る人からこの鐘の音が浄土まで響くのだと、聞いた事があつた。彼れは、「そんな筈はない。」と、それを信じはしなかつた。そして、永い間それを忘れてゐた。——が、それが、今になって、よみがえへつて来た。彼れは、鐘をならしたら弟のためになる、と心から思つたのではなかつたが、ただ形式的な考へで、それをならした。そして、自身に對するある、輕蔑の念を感じた。

鐘をならし了へて、寺院の本尊の前へ行かうとした。そこで彼れは、組の若い娘が彼れの方を見て微笑したるのに氣がついた。三吉は、娘が自分の輕卒な仕わざを冷笑して居るのだと思つて、ある恥かしさと、娘に對する反抗的な氣分とを感じた。

本尊の前で、組の者が詠歌を唱へてゐる間三吉は、後ろの腰掛で坐つてゐた。彼れは、さきの娘が、その細い眼で自分の方を見てゐるか、ゐないかぐらゐにしなから、やはり微笑してゐるのに氣がついた。彼れは、「やはり女は自分を冷笑しているのだ。」と思つた。そして、自分がをかしげば風をしてゐるのだらうかと、自身を省てみたりした。

次の寺院へ行った時に、彼れは娘が、どうするか、ためしてやらうと思つてまた、鐘をならした。娘は、彼れのする事に注意して見てゐた。そしてやはり分るか分らぬかぐらゐに微笑してみせた。

組の者が詠歌を唱へてゐる間、娘は後ろで黙つてゐた。そして時々三吉の方を見た。三吉は、女の眼が彼れの眼と行き会ふと、女はすぐそれを避けてゐるやうに思うはれた。——が、彼れは女が眞に自分の方を見て、自分の視

線と出會ったら避けたりしてはゐない、と思った。——それは、女の眼は細かく、——丁度眼病をわずらふて居る人が眼をわさくして強ひて物を見まいとして居るかのやうであつたので——確かに見極める事は出来なかつたのであつた。

どちらであるとしても、三吉は、氣味が悪かつた。

夕方になって、宿についてからも、娘は絶えず彼れに注意してゐるらしく、三吉には思はれた。——娘は三吉などが居る處とは、離れた處で老媪たちと一緒にゐながら、ぢろりぢろりと、ちよつとづゝ、彼れの方を見てゐると、

三吉は、娘が彼れに戀してゐるのかも知れないと思つた。そして、今までの事を思ひ返してみると、さうらしく思はれた。

彼れは迷惑な感じがした。そして、深くその女の事などは考へまいとした。——

それから三日して、巡禮は終つた。

三吉は、終りまで弟によく似た女に會ふ事が出来なかつた。

三吉は、組の娘に戀せられてゐるらしかつたのが、或る迷惑さを感じたがそれは、ほんの一時であつた。そしてそれから、甘い快さを覚えた。女の微笑し對しても、温かな、そして善良な微笑をもつて答へるのに努めた。が、それより外に彼れはどうもしなかつた。三吉は、弟の亡霊が現はれてゐたやうな、女の事を忘れる事が出来なかつた、彼れは、實際、あの女は弟の亡霊であつたのか、とも思

